就中(一)は多を削りて少きを益すことをのべ、(二)に於て謙德がその根本であることをのべてゐる。

弓を張るときは上弭(ウワハヅ)を抑へ下弭(シタハヅ)をあげて弦をかける。天の道は弓を張る場合と同じ樣に高きものは抑へ、下きものをあげ、餘あるものを削り、足らぬところに補ふものであるが、人の行は之に反對である。もし己れの餘裕を以て天下に奉仕するものがあればそれは天の道に從ふ人である。聖人が爲して恃とせず、功成るも之に止らぬのは卽其意味である。

第七十八章

(一)〔天下莫レ柔二弱於水一、而攻二堅强一者、莫二之能勝一、以二其無一以易レ之〕

(二)弱之勝レ强、柔之勝レ剛、天下莫レ不レ知而莫二之能行一。是以聖人云、受二國之垢一、是謂二社稷主一、受二國之不祥一、是謂二天下王一。〔正言若反〕

攷異 (一)は第四十三章の錯簡であらう、既に彼章に於て之を說明したから、之には再び言及

せぬ。

(二)淮南道應訓此句を引く、强字剛字の下也の字がある。而莫之行の句今の王本には而字之字がないが、舊鈔河上公本傅奕本淮南子にはある。景龍碑には而之二字なく、其上莫不知を莫能知に作る。想ふに碑は簡約を旨として刪つたもので、淮南に引かれた文が古形であらう。聖人云范應元本云を言に作り、傅奕本は聖人之言云に作る。受字の上二ヶ所とも淮南にな能字があるが他本にはない。主字王字の上范應元本河上公本には之字があるが、淮南子にはない。傅奕本も之字があつて不祥の下の是謂を是爲に作る。天下王の下范本には也字がある。淮南道應訓に引かれた文も天下王に終つて下に正言若反の四字がない。恐らく正言若反の四字は評語の本文に混入したものであらう。

柔弱が强剛に勝つといふことは、人もよく知るところであるが、實際に行ふ人は少い。そこで聖人は教へて、能く國の垢を受けて社稷の主となり得べく、よく國の不祥をうけて天下の王となり得べしといはれた。受國之垢とは、莊子天下篇に「人皆先を取る、已れ獨り後をとりて天下之垢を受くをいふ」とあるから、進取せず退守する意であらう。不祥も亦垢と同じ意義である。

第七十九章

(一)和大怨、必有餘怨、可以爲善、是以聖人執左契、而不責於人。〔有德司契、無德司徹〕

(二)天道無親、常與善人。

校異 (一)此章諸本異同少く、但傅奕本と范應元本は有德司契の上に故の字があるが恐らく衍字であらう。而して有德司契以下八字は上文左契字の注釋が本文に入つたものであらう。

(一)此章の意は捕促しがたい。但し執左契三字で略想像がつく。禮記曲禮上篇に「獻粟者執右契」といふ句があつて、其意味は粟卽粱稻の類を獻ずる場合は其容積が大きく且つ何時までおいても腐敗しないものであるから、實物を持つて行かずに證券を獻ずるが禮であるといふ意。古の證券は符契か質劑かを用ゐたもので、符契は二枚の割符、其右契をもつ人は額面の物品を受取る權利を有し、左契はその引合せの證據となるもので、これを所有する人は右契を持つ人の要求に應じて物品を渡す義務があるわけである。乃で此章聖人執左契の一句は、第八十一章の「聖人盡以與人」といふ意と同じで、聖人は自ら財產を積まうとせず、常に人に與へることを考へるといふ意であらう。而して有德司契の四字は「聖人執左契」と同義で、無德司徹の徹の字は剝ぎ取る意であるから、司契は施し與へることゝ、司徹は剝ぎ取ることであらう。剝ぎ取ることを計畫すれば怨を受ける。怨を受けて後調和をやつても必ず餘怨が殘るに定つてゐるから、聖人は人に與へて剝取をさけるものだといふが此節の主意であらう。

(二)は(一)と連絡ない一節で、天道は親疏の區別なし、萬人に平等で、たゞ善人に與するといふだけの意であらう。

第八十章

小國寡民、使有什伯之器而不用、使民重死而不遠徙、〔雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之、使民復結繩而用之〕甘其食、美其服、安其居、樂其俗、鄰國相望、鷄犬之聲相聞、民至老死、不相往來、

攷異 右は大體道藏王弼本を鈔錄したのであるが、たゞ使民復結繩の民字は藏本人に作つてゐるが、唐人の改めた所と推定されるから河上本に從つて改めた。河上本には使有什伯之器の句と句之字の上に人字があつて、什伯で句を切つて鷄犬を鷄狗に作つてゐる。傅奕本と范應元本は使有什伯の有字の上に民字があり、甘其食の句上至治之極民各の六字あつて、安其居、樂其俗の二句を安其俗樂其業に作り、相聞の下に使字がある。此章に於て〔 〕內に挿んだ部分は其上の語と意味が重複するから、恐らく古い注本が本文に誤入したのであらう。又史記貨殖傳に老聃の言を引いて

至治之極、鄰國相望、鷄狗之聲相聞、民各甘其食、美其服、安其俗、樂其業、至老死不相往來、

とあつて、此章下半と略同じであるが、史記ではこれだけで完全な語をなしてゐて、此章前半は後半を敷衍したらしくも見える。恐らく此章に於て古い部分は後半のみであらう。然し又莊子の胠篋篇には此章「甘其食乃至不相往來」の句があつて之を老子の語としてゐない。從つて此章が老聃であることは餘程疑問としなければならぬ。然し今此章について大略を解すれば次の如くであらう。

此章は老莊派の理想の社會を描寫したものである。什伯之器は說文繫傳伯字の下に老子の語

を引いて什伯の器は兵革の屬だと注してゐる。什伯の器を兵器だとするのは古兵卒の部曲を呼ぶに五人を伍となし、十人を什となし、百人を伯となし、又軍旅を呼ぶに或は什伍といひ、或は什伯といふから、什伯の器は兵器と解せられるのである。道家の理想的の社會は小國で人民も少く、兵器はあつても戰はせず、生命を大切にして、舟車はあつても之によつて遠方に出ることなく、民は各其衣服に甘んじ、其職業を樂しんで、國と國とが鄰接して鄰の國の鷄や犬の聲が聞えるくらゐ近くても一生涯往來もせぬ樣な社會である。

第八十一章

(一)信言不美、美言不信、善者不辯、辯者不善、知者不博、博者不知、
(二)聖人不積。既以爲人、己愈有。既以與人、己愈多。
(三)天之道利而不害、聖人之道、爲而不爭、

攷異 (一)傅奕本善者辯者の兩者字言に作り、兪樾は信言美言の兩言字を者字の誤りだといふ。

其說は河上公注に本づくのであるが、聖語藏本の河上注によると、河上公本も原來言に作つて者に作らぬこととなる。

(二)魏策に老子の語を引いて「老子曰聖人無積、盡以爲人、已愈有、盡以與人、已愈多」とあるは此節と同じで、既は盡の意である。

此章河上公本には顯質章と題して一章としてゐるが、連絡なき三節があつまつてゐるものであらう。(一)の中にも二句づつ三語を區別され得る。其意は解釋を用ゐないで自ら明かであらう。

道德經　下卷　終

9040

改造選書

昭和二十二年十二月二十日　印刷
昭和二十二年十二月二十五日　發行

老子の研究（下）
定價　七十五圓

著者　武內義雄
裝幀者　恩地孝四郎
發行者　山本俊太　東京都中央區京橋一ノ三
印刷者　大野治輔　東京都北區稻付町一ノ二〇八
發兌　改造社　東京都中央區京橋一ノ三　振替東京八四〇二　電話京橋(56)一六一二　(五六一九〇)

（小高製本）

社會式株給配出版日本　九ノ二町淡路田神區田代千都京東
社會式株刷印葉二　八〇二ノ一町付稻區北都京東
元給所　配給
印刷

改造選書

送料各冊十一圓
＊印八品切

國富論（一・二）　アダム・スミス　竹内謙二　一＊ 二75＊

エミール（上・下）　ルソー　内山賢次　上＊ 下＊

ロシア文學の理想と現實（上・下）　クロポトキン　伊藤整　上＊ 下20

カントの平和論　朝永三十郎　＊

ジンメルの經濟哲學　恒藤恭　＊

哲學概說　桑木嚴翼　75

日本社會史　本庄榮治郎　40

近世日本農村經濟史論　德川時代　土屋喬雄　60

ダーウィン傳　駒井卓　40

アインシュタイン傳　桑木彧雄　70

若きヴェルテルの惱み　ゲーテ　阿部六郎　＊

老子の研究（上・下）　武内義雄　上65 下75

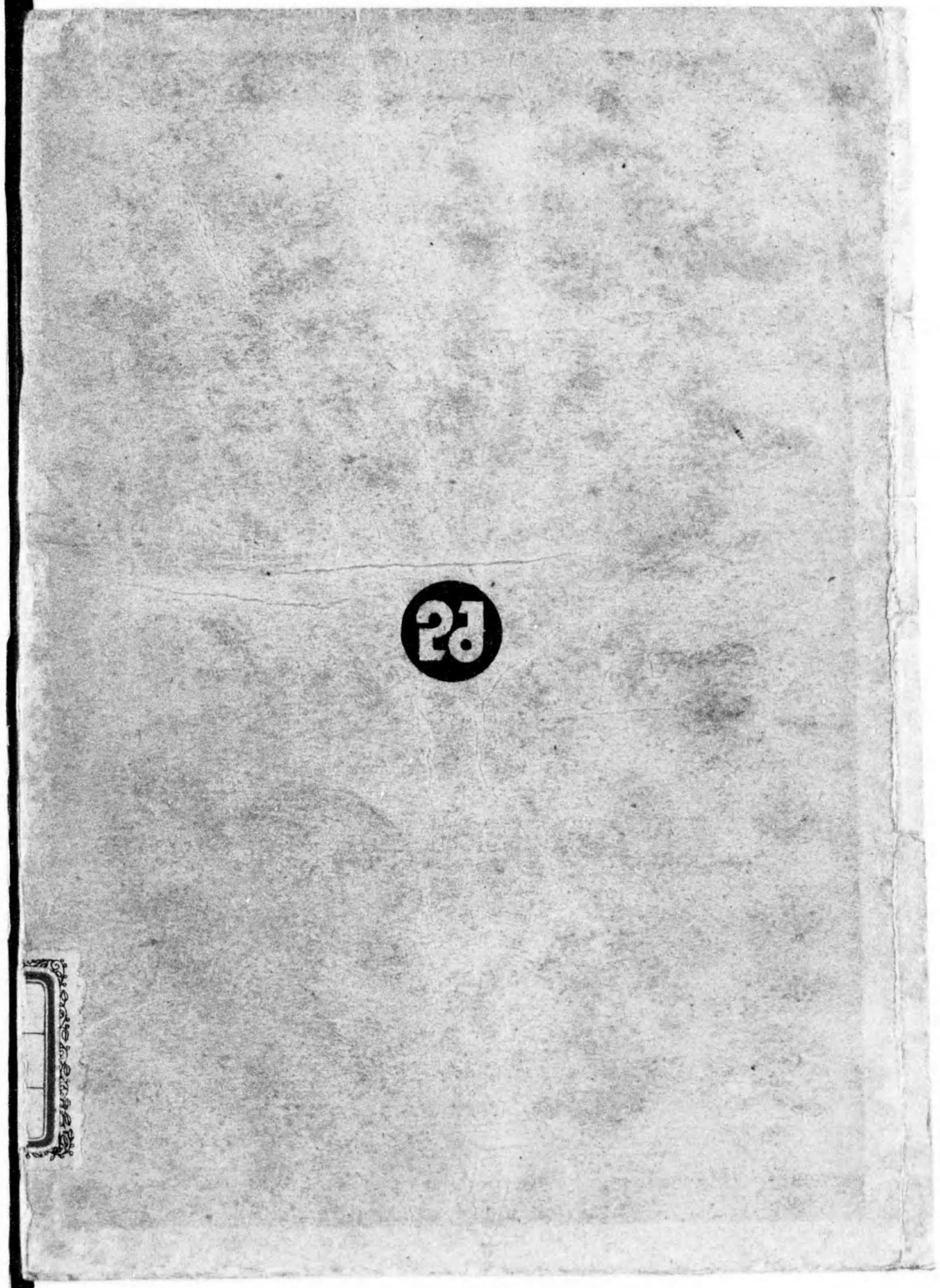
二重の誤解　メリメ　江口清　近刊

國富論（三以下）　アダム・スミス　竹内謙二　近刊

通貨調節論　フラートン　阿部季房　近刊

23年 6月10日 ㊎

23.7.31

閲覧済

終